

# 大学生における、中高時の スクールカースト経験の長期的影響

小原 一馬, 平山 愛理

宇都宮大学教育学部研究紀要 第68号 別刷

2018年2月28日



# 大学生における、中高時の スクールカースト経験の長期的影響

Long-range effects of clique hierarchy in Japan

小原 一馬<sup>†</sup>, 平山 愛理<sup>††</sup>

KOHARA Kazuma, HIRAYAMA Airi

## 概要 (Summary)

現在の中高生の学校生活を特徴づける言葉として、しばしばスクールカーストという概念がとりあげられる。先行研究においては、こうしたスクールカーストが①現在の中学校において普遍的な現象であり、②その本質は固定化されたグループ間の序列的な関係にある、とされる傾向があった。またスクールカーストによって生じる問題としては、その渦中におかれた者について以外はまだほとんど明らかにされていない。そこで本稿では、大学生の中高でのスクールカースト経験に関して、アンケート調査を行った。その結果、スクールカーストを経験している者は中高ともに半数に満たず、スクールカーストそのものの経験が、大学生において劣等感に影響すること、またクラスでの位置づけは大学の1、2年生では自信に影響する一方、3年生以上ではその影響が見られなくなることが分かった。また序列化とスクールカースト経験の関係も明らかにした。

キーワード：スクールカースト、仲間集団、いじめ、劣等感

## 1 問題

### 1-1 スクールカーストと固定されたグループ

近年、中高生の学校における人間関係を示すキーワードとして、スクールカーストという言葉が注目されている。

スクールカーストという言葉はまだ学術的に十分に整理された概念ではないが（鈴木2012）、次のような森口（2007）の定義によって紹介されることが多い（鈴木2012、水野ほか 2015）。

スクールカーストとは、クラス内のステイタスを表す言葉として、近年若者たちの間で定着しつつある言葉です。従来と異なるのは、ステイタスの決定要因が、人気やモテるか否かという点であることです。上位から「一軍、二軍、三軍」「A、B、C」などと呼ばれます。（森口 2007）

この定義からわかるのは、スクールカーストがクラス内のステイタスを示すということだが、これまでのスクールカースト研究においては、スクールカーストにもう一つ欠かせない性格が挙げられている。それは、このステイタスが個人個人のものではなく、それぞれが所属する固定化された交友グ

<sup>†</sup> 宇都宮大学 教育学部 (連絡先: koharak@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

<sup>††</sup> 栃木県庁環境森林部県北環境森林事務所

ループのものであり、このグループ間の力関係を示すものだという事だ（水野ほか2015、石田2017、貴島ほか2017）。

近年、中高生の世界が、同じ価値観を共有する仲間に分断されがちだということは宮台（1994）の頃から指摘されてきたが、この時期の研究においては、「総オタク化」したそれぞれのグループは互いに無関心で、グループ間に対等だと理解されていた。彼らの上の世代は「新人類」と呼ばれ、消費社会にどっぷりつきながら、消費による差異化に邁進していたのに対し、バブル崩壊後に就職活動を行った「氷河期世代」、ゆとり教育を受けた「ゆとり世代」と言われた彼らは、共通の価値基準での競争に関心を持たなくなったとされた。特に大学生や20代前半においては、経済的なゆとりが縮小していく中で、以前のような顕示的消費によってアイデンティティを確立するというようなあり方は見られなくなっていった（三浦2005）。

このような分析は大学生以上にはあてはまりがよかったかもしれないが、しかし中高生の世界で進んでいったのは別の事態だったようだ。それがスクールカースト化である。

つまり、それぞれの価値観によって小グループに分断された中高生は、そのまま没交渉となるわけではなく、学校の中で共同生活を続ける中で、グループ間に上下の力関係が生じ、固定化されたグループがそのままランク付けにつながっていったのだと考えられる。

## 1-2 スクールカーストによるネガティブな影響

こうしてできあがったランクは、学校生活のさまざまな場面において影響を与えることとなり、そこで低い位置におかれたものはしばしば屈辱的な待遇に甘んじさせられることとなる。鈴木（2012）はこの問題を次のようにまとめている。

まず一つ目として、「スクールカースト」地位の中で下位に置かれた生徒は、クラスメイトから身分の低い存在、つまり目下の存在だとみなされて、いじめの標的になりやすいということ。そしてもう一つは、たとえいじめにあわなかったとしても、自分に自信をなくし、学校生活への適応に大きな影響を及ぼすということです。（鈴木2012）

鈴木（2012）は、クラス内で上に位置づけられたものが、学校の行事や席替えなど、クラスの中でさまざまな決定権を独占し、教師からの支持も得て、自分たちでクラスのすべてを決められるようになることを示した。一方、下に位置づけられた者は、クラスの話し合いで意見を述べても無視されるので、次第に発言自体しなくなり、行事の中で何をしてもまるで注目されず、楽しむこともできないので、積極的に参加しようという意欲も奪われていくとされる。その結果、他の生徒や教師からも、消極的だというレッテルが貼られて、そうしたスクールカーストの秩序が、もとの能力や意欲によって説明されてしまいがちだとされた（鈴木2012）。

このように、下におかれることは何もメリットがないにも関わらず、彼らがこうした秩序に逆らえないのは、一つにはこうした秩序が「能力や意欲に基づく」という見せかけを、他の生徒や教師だけでなく、彼ら自身も受け入れてしまいがちだからであると考えられる。その結果もあって、カーストの秩序はいったんできあがると安定する傾向が強く、クラスの中で位置が下がるものはいても、上がるということはほとんど起こらない（鈴木2012）。それがゆえに、彼らもこうした現実が「変えられないもの」としてあきらめざるをえなくなる、という悪循環が生じている。また、カーストの下位者は、カーストをめぐる競争において、このようにある意味「自発的に」撤退させられているというだけではなく、カースト上位者に刃向って、彼らの権力によりさらに下に落とされてしまわないように、

目立たないよう振る舞うことを強いられてもいる(鈴木2012)。

このように、スクールカーストはその下位者に屈辱的な経験を味あわせるだけでなく、そのような結果が本人自身の意欲や能力から来ているように見せかけるので、その自尊心をも傷つけることとなる。

本稿の主な関心は、先行研究で示されたこのようなスクールカーストという状況から脱した大学生において、その影響がどの程度残っているのかにある。スクールカーストの経験者は、そのネガティブな経験をどれだけひきずってしまうのだろうか、またどうしたらそれをポジティブなものに変えていくことができるのだろうか、これが本稿の第一の関心である。

### 1-3 スクールカーストの長期的な影響とその克服

スクールカーストの長期的な影響は、いじめに関する研究から、自尊心の低下や特性不安としてあらわれると推測される。坂西(1995)は、大学生対象に過去の(主に小中の)いじめ体験と本人の考えるその影響を調査した。その結果、いじめられていた当時の苦痛が大きいほど身体的に疲れやすくなったり心理的に不安に感じたりというネガティブな傾向がある一方で、人の気持ちをよく考えるようになるというような肯定的な側面もあることを示した。

この研究を元に、荒木(2002)はこうしたネガティブな影響がどのような場合に弱められ、ポジティブな影響がどのような場合に強まるかを調べている。その結果、「人生はいいものだ」「明日はいいことがある」などといった前向きの信念を持っているとネガティブな影響が弱められ、「困っている人を助けたい」「これまでの人生で学んだことを人々のために役立てたい」というような愛他的信念を持っていると、精神的な強さを得やすいという結果を示した。ただし、こうした結果について穿った見方をするなら、これらは本人の主観的な思いにすぎないとも言えるかもしれない。例えば、愛他的な信念を持っている人は、自分自身のいじめ体験が精神的な強さに変わっているという希望的な観測をいだきやすい、とも解釈できる。

これに対して、水谷・雨宮(2015)は、「体が不調を感じる事が多くなった」や「相手の気持ちをよく考えるようになった」というように、いじめ被害後の精神的変化についての自己評定をたずねる代わりに、大学生の現時点での状況をどのように感じているかをたずね、いじめられた経験の有無や、いじめられていた時の苦痛の程度によって、現在の幸福度(Well-being)や自尊感情、特性不安などがどのように異なってくるかを調べた。そのパス解析の結果から、小学校におけるいじめ被害が自尊感情を低下させ、現在の幸福感を低くする影響が見出されている。また中高生時のいじめ経験は、特性不安を高める傾向があり、高校生のいじめ経験は直接現在の幸福度にも影響を与えていることが示された。この研究では、いじめ経験にポジティブな長期的な効果は見いだされなかった。

これらの研究から、中高生におけるスクールカーストの経験も、自尊心の低下を介して現在の幸福感に影響を与えている可能性が推測される。

### 1-4 スクールカースト体制そのものの影響

スクールカーストの影響として、いじめと同様、中高におけるクラス内での低い位置づけが、自尊心の低下を介して、その後どれだけ持続的な影響を与えるのかということがまずはあるのだが、本稿がもう一つ着目したいのは、スクールカースト的な体制そのものの影響である。

これまでのスクールカースト研究の多くに共通する暗黙の前提は、「現在では、どこの学校でもス

クールカーストが存在している」という見方だった。これまでのスクールカースト研究のうち特に大きな影響を与えている鈴木(2012)は次の引用にも見られるように、

今回、大学生を対象として、これまでの学校経験の中での人間関係に関するインタビューを行ったところ、「スクールカースト」、すなわち同学年の児童生徒に「地位の差」が「ない」と答えた人は一人もいませんでした。

として、学内での地位の差があること＝スクールカーストがある、という前提で、それが現在どの学校でも見られる現象であると考えている。水野ほか(2015)、貴島ほか(2017)もどこでも学級がスクールカースト化しているという前提で、どのような人がどのようなグループに所属し、どのようなグループに所属している人が、クラス内でどのような位置づけになるかを検討している。

しかし、石田(2017)は、必ずしもこうしたクラス内での序列化が認識されているとは限らないことを示し、しかもその認識が男女でずれがあることを示した。たとえば高校時代に関して、男子は女子グループの間に序列化があったと認識する割合が高いが、女子自身は女子のグループ間における序列化があまりなかったと認識していた。また序列化の基準としても、男子⇒女子においては、容姿と答える割合が圧倒的に高い(81.8%)のに対し、女子⇒女子においては、多様な基準が設定され、容姿をその理由に挙げる割合は、序列化があると答えたものの37.5%にすぎないことが示されている。

このような認識のずれについて、石田(2017)は「男女を含めたクラス全体においてグループ間の序列化が共有されているわけではないことを示唆している」とし、

スクールカーストといったグループ間の階層や序列化は、それぞれの児童生徒が自身の頭の中で個々に認識し、学級内の人間関係をより単純化して認識しようとするグループ化やラベリングなどによるもので、それが学級内のクラスメイトに共有されているとは限らない可能性がある

としている。つまりスクールカーストがあるかどうかは、個人の認識の問題にすぎないのではないかと、という問題を提起している<sup>i</sup>。

もちろんそのような可能性も確かにあるかもしれない。しかし、男子と女子の序列化の認識の違いの解釈としては、「男子による女子の序列化」と「女子による女子の序列化」とが異なっているだけでも考えられるだろう。容姿にもとづく男子による女子の序列化は、女子による女子の序列化にある程度影響するだろうが、その一部にすぎないという状況を示しているのだとも解釈ができる。

本稿の関心からより重要なのは、この石田(2017)のデータは、グループの序列化を中学・高校で経験している大学生と、そうでない大学生がいるという可能性を示唆しているということである。またそうしたグループの序列化を「いわゆるスクールカースト」として認識しているかどうか、別の問題としてある。

このような問題意識から、本稿では次の3点を課題として設定する。

- 1 現在の大学生は、中高において、どの程度の割合が「スクールカースト」を経験しているのか？
- 2 現在の大学生は、中高におけるどのようなクラスの状況だった場合に、「スクールカースト」があると認識することが多いのか？
- 3 現在の大学生が中高において経験した「スクールカースト」は、大学生においてどのような影響を残しているのか？ 特に劣等感や自信にはどう影響するのか？

## 2 仮説

- 1 中高における「スクールカースト」の経験は、中学でその割合が高く、高校では低い。
- 2 スクールカーストがあると認識するのは、①クラスが固定したメンバーに分断されていて、グループ間の交流が少ない状態であつ、②グループ間の序列がはっきりしている状態である
- 3 中高でスクールカーストを経験すると、大学でも劣等感を感じやすくなる。

## 3 方法

大学生に対し、アンケートを行った。

調査対象 宇都宮大学教育学部の1～4年生206名（女子122名、男子77名 性別未記入7名）。授業時に配布。

表 1 回答者の学年と性別

		学年				合計
		1	2	3	4	
性別	女性	45	39	32	6	122
	男性	29	35	8	5	77
合計		74	74	40	11	199

3年生の男子が少ないことに留意する必要がある

調査時期 2016年11月

アンケートの本文は、平山（2017）を参照。本稿は平山（2017）のデータの再分析に基づいている。なお、性格については5因子説をベースに、回答の負担を減らすため、各因子ごとに1つの質問を設定した。

## 4 結果

### 4-1 大学生は、中高でどの程度、スクールカーストを経験しているのか？

まず大学生がどの程度、スクールカーストという言葉を知っているか調べたところ、その84.4%がスクールカーストという言葉を知っているか「よく知っている」あるいは「なんとなく知っている」と答えた。

この84.4%に、スクールカーストが中学三年生のクラス、高校のクラス（学年は特定していない）に存在していたかたずねたが、どの程度知っているかによって統計的な有意差は見られなかった（カイ二乗検定 5%水準）。

そこでこれから、スクールカーストのある・なしが、どのような条件で決まるか見ていく際、スクールカーストという言葉を知っている層を対象にこの後の分析を行う。

表 2 スクールカーストの存在×中高×性別

		はい	いいえ	わからない
中学	女	49.5%	29.3%	21.2%
	男	37.7%	31.9%	30.4%
高校	女	32.3%	45.5%	22.2%
	男	18.2%	62.1%	19.7%

男女とも、中学でよりスクールカーストが存在したと捉えられており、男女では、中高とも女性のほうが「はい」の割合が高い（「はい」と答えたものを1点、それ以外を0点としてt検定、みな1%水準有意）。

中学でスクールカーストが存在したと考えている人の割合が、高校時よりも高いという結果は、石田（2017）においてグループ間の序列化の認識をたずねた結果と一致している。その一方で、男女間の差に関して、中学では同様の結果となっているが、高校ではむしろ男子のほうが男子自身のグループの序列化について女子の女子グループの序列化の認識より高いという結果となっていた。

ではどのような場合に、スクールカーストがあったと認識するのだろうか？

#### 4-2 どのような場合に、スクールカーストがあったと認識するのか？

##### 4-2-1 友人間で固定されたグループがあった場合に、スクールカーストがあったと認識する？

まず、グループがどの程度固定されていたのか、調べてみる。（「あなたのクラスでは友人間で固定されたグループが形成されていましたか？」）

表 3 固定されたグループ×中高×性別

		はい	いいえ	わからない
中学	女	95.1%	1.6%	3.3%
	男	85.7%	6.5%	7.8%
高校	女	91.0%	7.4%	1.6%
	男	68.9%	24.3%	6.8%

スクールカーストの存在と同様、中学でより友人間で固定されたグループが形成されていたという割合が高く、男女では、中高とも女性のほうが「はい」の割合が高い（「はい」と答えたものを1点、それ以外を0点としてt検定、みな1%水準有意）。男女別に中高を比較すると、女子のみでは有意差はでなかった（男子では1%水準有意）。

この質問には多くの人が「はい」と答えているため、クラスの友人間の関係の流動性をはかるため、もう一つの質問も同時に参照したい。この質問に「はい」と答えている人に対して行われた、次の質問だ。「他のグループとの交流の頻度はどのくらいありましたか（選択肢は4段階）」



この二つの質問により、クラス全体での交流頻度を、グループにわかれていない状態から、グループ間の交流がほとんどない状態まで、5段階にわけ、スクールカーストがあったかどうかとの関係をクロス表にあらわした。

((ウ)で「わからない」と答えた人は、計算から除いている)

表 4 グループ間の交流×スクールカーストの存在(中学)

		スクールカーストがあった	
		はい	いいえ・わからない
グループ間交流	ない	0.0%	100.0%
	あまりない	63.2%	36.8%
	時々あった	49.2%	50.8%
	よくあった	39.7%	60.3%
固定グループがない		0.0%	100.0%

表 5 グループ間の交流×スクールカーストの存在(高校)

		スクールカーストがあった	
		はい	いいえ・わからない
グループ間交流	ない	0.0%	100.0%
	あまりない	40.0%	60.0%
	時々あった	33.3%	66.7%
	よくあった	23.4%	76.6%
固定グループがない		13.0%	87.0%

グループ間の交流が少ない時、スクールカーストが生まれやすいことがここからわかる。また固定のグループがない時にスクールカーストがあったと言っている人は、中学には一人もいず、高校でも少ない。

ただし、グループ間の交流が全くない場合には、スクールカーストが見られないことも重要である。交流が全くない場合には、次に見るような上下関係も存在しなくなるからだと考えられる。

このようなかたちでの、スクールカーストと友人関係の流動性の関係の強さを示すため、次のように点数化して、スクールカーストのあり・なし(わからない)との順位相関を求めた。(グループ間交流ない=0、グループ間交流あまりない=4、グループ間交流時々ある=3、グループ間交流よくある=2、グループに固定されていない=1)

中学での順位相関係数(ケンドールのタウ -0.19) 高校での順位相関係数(ケンドールのタウ -0.16) 相関の強さは、あまり高くないが5%水準有意ではあった。

## 4-2-2 グループ間に上下関係があった場合に、スクールカーストがあったと認識する？

(キ) クラス内のグループ間で上下関係はありましたか？

表 6 グループ間の上下関係×中高×性別

		グループ間に上下関係			
		はっきりあった	曖昧だがあった	ほとんどなかった	なかった
中学	女	18.0%	48.4%	25.4%	8.2%
	男	11.7%	57.1%	22.1%	9.1%
高校	女	8.4%	41.2%	37.0%	13.4%
	男	8.2%	28.8%	35.6%	27.4%

スクールカーストの存在や固定されたグループと同様、グループ間の上下関係についても、男女とも、中学でよりグループ間に上下関係があったという割合が高く、男女では、女性のほうが上下関係があったという割合が高い(「はっきりあった」を3点、「曖昧だがあった」を2点、「ほとんどなかった」を1点、「なかった」を0点としてt検定、みな1%水準有意)。ただし中高別に男女を比較すると、中学では有意差はでなかった(高校では1%水準有意)。

表 7 グループ上下関係×スクールカースト存在(中学)

		スクールカーストがあった	
		はい	いいえ・わからない
グループの上下関係	はっきりあった	82.8%	17.2%
	曖昧だがあった	47.9%	52.1%
	ほとんどなかった	16.2%	83.8%
	なかった	7.1%	92.9%

順位相関係数(ケンドールのタウ) 0.43

表 8 グループ上下関係×スクールカースト存在(高校)

		スクールカーストがあった	
		はい	いいえ・わからない
グループの上下関係	はっきりあった	60.0%	40.0%
	曖昧だがあった	47.6%	52.4%
	ほとんどなかった	6.8%	93.2%
	なかった	6.5%	93.5%

順位相関係数(ケンドールのタウ) 0.43

このように、スクールカーストのあるなしは、グループ間の上下関係のあるなしと大きく関わっていることがわかる。

ではこれでスクールカーストがある状態を、「友人間の関係がグループに固定されていて」「グループ間に上下関係がある」状態だと捉えられていると言っても構わないのだろうか？

スクールカーストのありなしを従属変数とし、標準化したグループの上下関係とグループ流動性を共変量に設定して、ロジスティック回帰分析を行ってみると次のような結果となった。

表 9 スクールカーストのありなしを従属変数としたロジスティック回帰分析（中学）

	B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B)	95% C.I. for EXP(B)	
							Lower	Upper
流動性(標準化)	0.258	0.187	1.904	1	0.168	1.295	0.897	1.869
上下関係(標準化)	-1.176	0.249	22.374	1	0	0.309	0.19	0.502
定数	-0.444	0.189	5.53	1	0.019	0.641		

強制投入法 NagelkerkeR<sup>2</sup>=0.288

表 10 スクールカーストのありなしを従属変数としたロジスティック回帰分析（高校）

	B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B)	95% C.I. for EXP(B)	
							Lower	Upper
流動性(標準化)	0.092	0.213	0.188	1	0.665	1.097	0.722	1.666
上下関係(標準化)	-1.212	0.252	23.176	1	0	0.298	0.182	0.487
定数	-1.385	0.234	35.074	1	0	0.25		

強制投入法 NagelkerkeR<sup>2</sup>=0.285

このように、中高とも、流動性の変数は独立では、有意の影響を与えていないことがわかった。

もちろん、統計上の傾向から、判断の原則そのものを直接導くことはそもそも不可能である。

ここでわかるのは、大学生が中高時代の過去において、そのクラスの友人関係をどのように捉えていた時、スクールカーストがあったと感じるかどうかということだけだ。グループ間に上下関係があったと感じるほど、スクールカーストがあると感じやすく、それはクラスの人間関係の流動性とは独立にそうした傾向がある。逆に上下関係とは独立に、人間関係の流動性は影響を与えていない。ただし、流動性が上下関係の強さに影響を与えている可能性はある。両者のスコアの相関係数（スピアマン）は中学校で-0.30、高校で-0.28あり、流動性が低いほど上下関係が強くなるという関係が見られる。もっともこの相関の背後にある因果関係は、逆向きである可能性もある（上下関係が強くなるほど、流動性が低くなる）。

### 4-3 中高でのスクールカースト経験は、大学生においてどのように影響するのか？

スクールカーストの経験の影響を、3-1 劣等感への影響 3-2 自信への影響 に分けて調べた。

#### 4-3-1 スクールカーストの劣等感への影響

劣等感を従属変数として、ロジスティック回帰分析を行った。共変量としては、性格の5因子と、中学および高校におけるスクールカーストの経験（あり／なし＋わからない）を投入、ワールドに基づく変数増加法で性格のうちの4因子（経験への開放性以外の、外向性、誠実性、協調性、神経症性向）および高校におけるスクールカースト経験が選択された（スクールカーストという言葉を、少なくとも「なんとなく」聞いたことがある人を対象）。

	B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B)	95% C.I. for EXP(B)	
							Lower	Upper
外向性	-0.509	0.188	7.327	1	0.007	0.601	0.416	0.869
協調性	0.654	0.255	6.596	1	0.01	1.924	1.168	3.17
誠実性	-0.35	0.166	4.454	1	0.035	0.704	0.509	0.975
神経症性向	0.31	0.167	3.449	1	0.063	1.363	0.983	1.89
スクールカースト高校	0.953	0.47	4.116	1	0.042	2.594	1.033	6.513
Constant	-1.475	1.025	2.072	1	0.15	0.229		

ワールドに基づく変数増加法 NagelkerkeR2=0.285

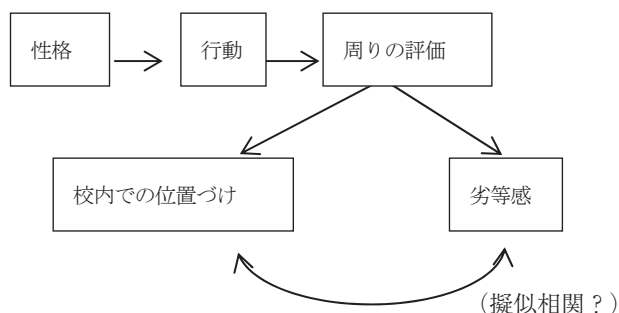
この結果から、4つの性格の因子以外に、高校にスクールカーストが存在したかどうか、大学生における劣等感にある程度の影響を与えていることがわかる（中学時のスクールカーストの影響は有意ではなかった）。

なお、これらの変数以外に、中学および高校でのクラスの中での位置づけの変数や、グループ間に上下関係があったかどうかなどの変数も加えてみたが、どれも有意な影響を与えていなかった。

個々の変数間の相関を見れば、中学および高校でのクラスの中での位置づけは、劣等感を感じるかどうかに関して、順位相関係数が中学で-0.23、高校で-0.17（ケンドールのタウ 中学との相関は1%水準有意、高校との相関は5%水準有意、「わからない」の回答は計算から除外）となり、弱い相関が見られるが、これらの相関は性格に関する変数とともにロジスティック回帰分析を行った時には、独立の要因とはいえないことがわかる。

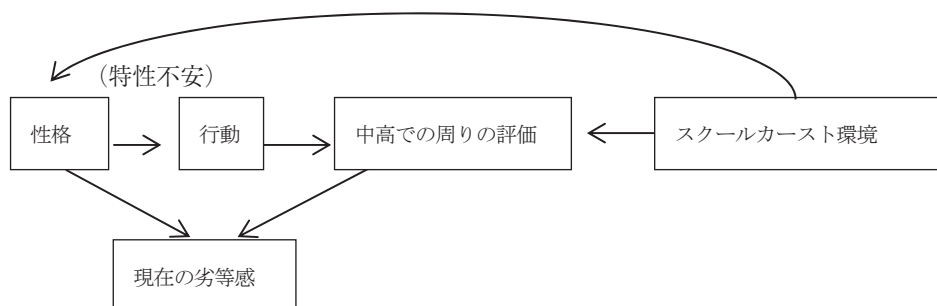
この、クラスでの位置づけと劣等感の間の相関は、性格によってある程度の説明が可能だろう。性格の各因子との順位相関を調べると、中学での位置づけは外向性と0.25、誠実性と0.18の正の相関が、高校での位置づけは外向性との相関が0.17あり、今回の調査結果の範囲では、校内での位置づけと劣等感の間の相関は疑似相関の可能性が否めない（図1）。

図 1



スクールカースト経験についても、性格との関連を調べてみると、神経症性向との関連のみ、中学で順位相関が0.15、高校で0.18となった（他の因子は有意差なし）。神経症性向は、今回「よくストレスを感じたり、不安になったりする」という質問により測っているので、先行研究（水谷・雨宮2015）で明らかにされている、いじめによる長期的影響で特性不安が高まっていたのと同じようなことが起こっていたのだと考えられる。これから次のような因果関係が推測される（図2）。

図 2



さて、このように現在劣等感を感じるかどうかは、もともとの性格によってある程度決まってくることがわかる。（ただしここで注意すべきなのは、この「感じやすさ」とは、同じ状況に対して「劣等感を感じやすい」という意味ではなく、この性格によって「劣等感を感じる」ような行動をしているかどうかとも違っているということである。その意味で「劣等感を感じることになりやすい」というほうがより正確な表現になる。）では、似たような性格の人が、スクールカーストを中高で経験した場合としない場合でどのような違いが出てくるのだろうか？ それをロジスティック回帰分析とはまた違った方法で確認してみたい。

劣等感を感じることになりやすい性格、なりにくい性格について、次のような方法で合成変数を作成した。

劣等感感じやすさ指標 = 外向性 + 誠実性 - 神経症性向 - 協調性

これを全体における人数比（1：3：1）にしたがって、三分割した。

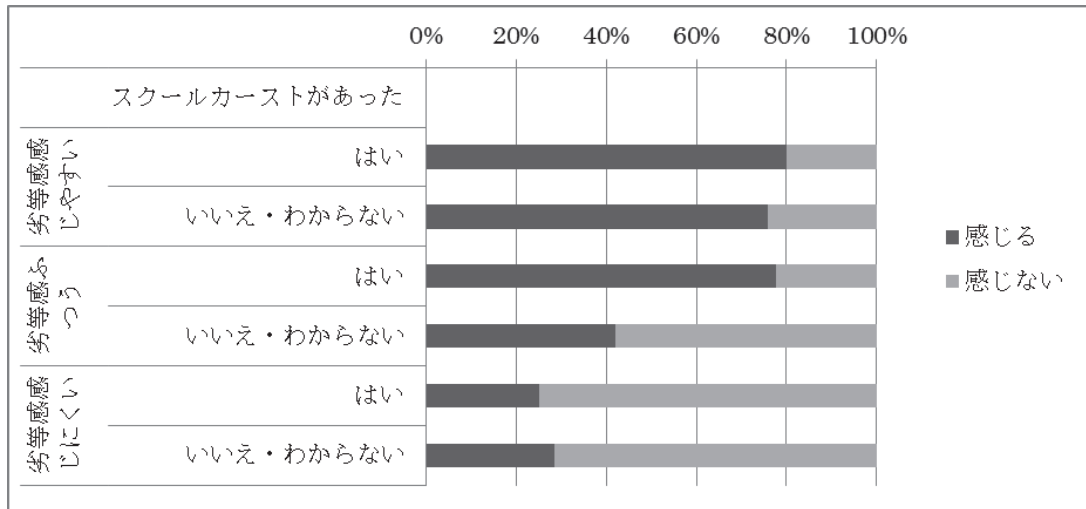
「劣等感を感じることになりにくい」 - 5 ~ -1 17.8%

「ふつう」 0 ~ 2 61.9%

「劣等感を感じることになりやすい」3～7 20.3%

この三つのグループごとに、高校時にスクールカーストが存在したかどうかと、現在劣等感を感じるかどうかのクロス表を作成し、グラフ化したのが次である（スクールカーストという言葉を、少なくともなんとなくは知っている層を対象）。

図3 劣等感を感じやすい性格ごとに、高校時にスクールカーストがあったかどうかと、現在劣等感を感じるか



劣等感を感じることになりやすさがふつうのグループにおいてのみ、高校でスクールカーストがあったかどうか現在の劣等感に影響していることがわかる。（順位相関係数0.32 ケンドールのタウ 1%水準有意、他のグループでは有意差なし）

#### 4-3-2 スクールカーストの自信への影響

スクールカーストの経験が、自信（「自分には優れたところがある」）にどう影響しているかを、重回帰分析で調べた。

まず5因子の性格および中高でのスクールカーストの経験、中高でのクラスの中での位置づけを独立変数とし、「自分には優れたところがある」（4段階）を従属変数として、重回帰分析を行った（ステップワイズ法）。すると、有意な独立変数として高校時のクラスでの上下の位置づけ、および外向性が残った（選ばれたモデルのR2（調整後）は0.15）。

表11 「自分には優れたところがある」重回帰分析 性格とスクールカーストの影響①

	B	Std. Error	Beta	t	Sig.
定数	1.114	0.237		4.705	0
高校上下の位置づけ	0.371	0.107	0.306	3.454	0.001
外向性	0.137	0.06	0.202	2.274	0.025

すると、高校でのクラスの位置づけと外向性によって、自信が決まることがわかる。

さらに、外向性と関係し、大学生の自信に影響する考えられるより具体的な項目を独立変数として、重回帰分析を行った（ステップワイズ法）。

#### 選んだ独立変数

あなたには胸の内を明かすことができる友人がどれくらいいますか？

あなたには気軽に遊びに誘える友人はどれくらいいますか？

あなたには現在打ち込めるような趣味や活動がありますか？

あなたの現在の大学生活はどの程度充実していますか？

あなたは普段から服装や髪形等のおしゃれに気を遣っていますか？

あなたは普段、友人等から服装（身なり）をほめられることがありますか？

初対面の人と話すのは苦手だ。

授業などのグループワークの時に、リーダーシップをとって、みんなの意見を一つにまとめることができる。

その結果、高校でのクラスの位置づけと、おしゃれを気遣っているかどうか、初対面が苦手でないかどうかによって、大学生の自信が決まることが分かった（選ばれたモデルのR2（調整後）は0.22）。

表 12 「自分には優れたところがある」重回帰分析 性格とスクールカーストの影響②

	B	Std. Error	Beta	t	Sig.
定数	1.283	0.31		4.141	0
高校上下の位置づけ	0.357	0.102	0.294	3.505	0.001
おしゃれ	0.292	0.095	0.259	3.079	0.003
初対面苦手	-0.195	0.064	-0.255	-3.038	0.003

同じ従属変数、独立変数で重回帰分析を男女別に行うと、女子では初対面が苦手かどうか、おしゃれを気遣っているかどうかの変数が残り（選ばれたモデルのR2（調整後）は0.16）、

表 13 「自分には優れたところがある」重回帰分析 性格とスクールカーストの影響② 女子のみ

	B	Std. Error	Beta	t	Sig.
定数	2.055	0.307		6.699	0
初対面苦手	-0.242	0.074	-0.365	-3.25	0.002
おしゃれ	0.318	0.128	0.279	2.484	0.016

男子では高校でのクラスの位置づけとリーダーシップによって決まることがわかった（選ばれたモデルのR2（調整後）は0.28）。ただし、男子で高校でのクラスの位置づけの影響が残った一つの原因として、今回の調査対象者の男子のほとんどが1、2年生だったことの影響が考えられる。

表 14 「自分には優れたところがある」重回帰分析 性格とスクールカーストの影響② 男子のみ

	B	Std. Error	Beta	t	Sig.
定数	0.52	0.409		1.27	0.212
高校上下の位置づけ	0.574	0.164	0.465	3.497	0.001
リーダーシップ	0.195	0.091	0.283	2.13	0.04

同様に学年で1、2年生だけを選ぶと、高校でのクラスの位置づけ、初対面が苦手かどうか、そして中学でのクラスの位置づけが残った(選ばれたモデルのR2(調整後)は0.29)。

表 15 「自分には優れたところがある」重回帰分析 性格とスクールカーストの影響② 下級生のみ

	B	Std. Error	Beta	t	Sig.
定数	1.33	0.341		3.899	0
高校上下の位置づけ	0.372	0.139	0.301	2.668	0.009
初対面苦手	-0.211	0.078	-0.259	-2.692	0.009
中学上下の位置づけ	0.313	0.146	0.241	2.146	0.035

3、4年生だけを選ぶと、現在打ち込めるような趣味があるかどうかだけが残った(選ばれたモデルのR2(調整後)は0.13)。

表 16 「自分には優れたところがある」重回帰分析 性格とスクールカーストの影響② 上級生のみ

	B	Std. Error	Beta	t	Sig.
定数	1.474	0.361		4.081	0
趣味	0.679	0.289	0.394	2.351	0.025

ここから、男子では高校での位置づけの影響が残りがちであるのに対し、女子では外向性(初対面が苦手かどうか)やおしゃれに気がつかっているかどうかによって、高校までの序列の影響が塗り替えられる傾向があることがわかる。女子においては、いわゆる「大学デビュー」によって新しい自分を手に入れられるし、逆に言えば、高校までに高いスクールカーストに属していたとしても、自信が持てるかどうかは、それと関係なくなってしまうということだ。

また1、2年生だけを見れば、中学における位置づけの影響までもが残りがちであるのに対し、3、4年生ともなれば、中高における位置づけを乗り越えて、打ち込める趣味があるかどうかによって、自信が持てるかどうかが決まり、またここに出てこないような要因の影響がより大きくなる。

## 5 結論と考察

スクールカーストを経験したと答えているのは、スクールカーストという言葉を知ったことがある層(全体の84%)のうち、中学女子ではほぼ半数、男子では4割、高校女子では3割、男子では2割だった。



またクラスのグループ間の上下関係がよりはっきりしていればしているほど、スクールカーストがあると感じやすく(中学高校とも順位相関係数0.43)、グループの流動性は、直接にはスクールカーストの存在認識に影響していないことがわかった(ただし間接には影響している可能性がある)。

高校でスクールカーストを経験すると、性格とは独立に、大学生の時点で劣等感を感じやすくなることが分かった。性格によって、劣等感を感じやすい層、感じにくい層、中間的な層に分けた場合、中間的な層においてのみ、スクールカーストの経験が劣等感に影響することがわかった。

また自分に優れたところがあると感じるかどうかに影響するのは、スクールカーストそれ自体の経験ではなく、高校時のクラスでの上下の位置づけと、外向性とであった。1、2年生だけで見ると、中学、高校双方でのクラスでの位置づけ、および初対面が苦手かどうかの影響しており、3、4年生だけで見ると、中高のクラスでの位置づけの影響は見えなくなって、今回用意した項目の中では、現在打ち込めるような趣味があるかどうかだけが影響することがわかった。

この結果から、スクールカーストというのは、現在の中高においても必ずしも一般的なものではなく、クラスの中に仮に序列があったとしても、それが目立たないことがしばしばある(特に高校で)ことがわかった。序列があからさまでなければ、いわゆるスクールカーストは事実上なかったことになる。

また劣等感を感じやすくも感じにくくもない普通の性格の人が、高校でスクールカーストを経験していると、大学生になっても劣等感を感じやすくなることがわかった。スクールカーストがあると感じること自体に意味があるので、学校側はそれを目立たせない工夫が必要となるだろう。

一方、自分に自信を持てるかどうかは、スクールカーストのあるなしとは別に、クラスの中での地位が高かったかどうかの影響していることがわかった。特に大学の一、二年の間は、中学・高校での地位をひきずる傾向があり、いわゆる大学デビューの困難さをうかがわせる結果となった。とはいえ、影響が残るのは1、2年までで、3年生以降になると、自分の趣味といえるものを持っているかどうかが重要になる。

これらの結果はまた、スクールカーストがあるということと、学校の中での地位の高い低いとは別物であり区別すべきである、という水野ほか(2015)、貴島ほか(2017)の主張を裏付けるものとなった。

## 参考文献

- 荒木剛. 2002. 「いじめ被害体験の長期的影響とレジリエンシー(resiliency)」。性格心理学研究 10(2): 108-9.
- 石田靖彦. 2017. 「各学校段階におけるスクールカーストの認識とその要因 — 大学生を対象にした回想法による検討 —」。愛知教育大学教育臨床総合センター紀要 7: 17-23.
- 貴島侑哉, 中村俊哉, 笹山郁生. 2017. 「スクールカースト特性尺度の作成と学級内地位との関連の検討」。福岡教育大学紀要. 第4分冊, 教職科編 (66): 27-37.
- 坂西友秀. 1995. 「いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差」。社会心理学研究 11 (2): 105-15.
- 作田誠一郎. 2016. 「『スクールカースト』における中学生の対人関係といじめ現象」。佛大社会学 40: 43-54.
- 鈴木翔. 2012. 『教室内(スクール)カースト』. 光文社.

- 平山愛理. 2017. 「スクールカーストが現在の大学生に与える影響について」 宇都宮大学教育学部卒業論文 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/sociology/2017hirayama.pdf>
- 三浦展. 2005. 『下流社会：新たな階層集団の出現』. 光文社.
- 水谷聡秀, 雨宮俊彦. 2015. 「小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響」. 教育心理学研究 63 (2): 102-10.
- 水野君平, 加藤弘通, 川田学. 2015. 「中学生における『スクールカースト』とコミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係：教室内における個人の地位と集団の地位という視点から」. 子ども発達臨床研究 (7): 13-22.
- 宮台真司. 1994. 『制服少女たちの選択』. 講談社.
- 森口朗. 2007. 『いじめの構造』. 新潮社.

## 註

---

<sup>i</sup> このような見方は作田 (2016) にも共通している。



# Long-range effects of clique hierarchy in Japan

KOHARA Kazuma, HIRAYAMA Airi